

# 雑感・出雲神話と出雲の国（3）

## ～大国主伝説（Ⅱ）国作り時代～

荒井 優（Masaru ARAI）

鳥取看護大学 学長

### 5. 大国主の国作り時代

青年オオナムチは、出雲の王スサノヲから生太刀と生弓矢を譲り受けて、大原郡（現在の雲南市木次町）城名樋山で、八十神を迎え撃ちこれを討伐した。これによって、青年オオナムチはスサノヲの娘スセリ姫を娶り、「大国主」となって出雲の王位を譲り受けた。大国主による国造りのはじまりである。

『古事記』『日本書紀』のほかに、『出雲国風土記』や『播磨国風土記』、『丹後国風土記』、さらに関係地域の神社伝承などを丹念につなぎ合わせていくと、北陸能登半島の平定・開拓、上越（新潟）の平定・統治、播磨国の平定・開拓、さらには九州、四国、大和にまで勢力範囲を伸ばしている状況をたどることができる。

私たちがここで追い求めていることは、大国主の国土開発の軌跡をたどることであり、それによって出雲の国がどのような拡がりをもつ国だったのかを知り、イメージすることである。

それを探るための資料・根拠として、私たちは、『古事記』『日本書紀』、また各国の『風土記』など、さらに各地域に残る神社伝承を積極的に活用する。1つ1つの資料は、それ自体としては、断片的なものかもしれないが、それらをつなぎ合わせることによって、意味深い内容が紡ぎだされ、隠されていた物語・歴史が浮き上がってくる。

#### （1）『古事記』に見る大国主の国作り

オオナムチが「兄弟の八十神を追い退け」、「坂のすそごとに追い伏せ、川の瀬ごとに追い払って、国作りを始められた<sup>1)</sup>」と「八十神の討伐」について記した、そのすぐ後に、『古事記』は出雲の王となった大国主の婚姻譚に物語を進めている。

ただし、大国主の婚姻については、注意しておかなければならない。一国の王が他国の女王または王女と婚姻することは、その国と縁戚関係を結ぶこと、言い換えれば同盟関係を結ぶことを意味していた。とくに大国主の場合は、他国の女王や王女と結婚することによって、その国を統合し開拓し、出雲国の領土を拡大していった。婚姻が、すなわち国作りなのである。大国主は、武力によるのではなく、「縁結び」によって、出雲国の血縁を拡大し、出雲国の種・子孫を他国に植え付けていった。大国主の神が「縁結び」の神といわれる由縁である。

『古事記』は、大国主の国作りとして、次のような順に物語を進めている。

- ① 八上姫との婚姻：大国主と結婚した八上姫は、しかし正妻スセリ姫を畏れて、木の俣に愛児を残して里帰りしてしまった。
- ② 奴奈川姫への妻問い：大国主は賢くも美しい女王・奴奈川姫に妻問いをするために、遠く越<sup>2)</sup>の国へ遠征に出た。
- ③ スセリ姫の嫉妬：大和国へ遠征に行こうとする大国主をスセリ姫が必死で止めた。大国主は、周辺諸国との和睦のために、異国の若い姫たちを娶り、出雲の国の領土を広げたが、しかしそれ

がスセリ姫の嫉妬を招いた。

- ④ 大国主の神裔：大国主の子孫の系譜が示される。
- ⑤ スクナヒコナとの出会い：異国から来た小人神スクナヒコナ（『古事記』では少名毘古那、『日本書紀』では少彦名）の協力を得て、大国主は各地の国土開拓に邁進した。
- ⑥ 大物主の三輪山への祀上：スクナヒコナ亡き後の協力者として現れた大物主を、大国主は大和国三輪山に鎮座させた<sup>3)</sup>。
- ⑦ 大年の神裔：ササノヲの五男・大年の子孫の系譜が示される<sup>4)</sup>。

以上が、『古事記』が描く大国主の「国作り」の内容である。『古事記』は、この後、大国主の「国譲り」物語へと展開されてゆく。

## （2）八上姫の結婚とその後

**八上姫のその後** 「因幡の白うさぎ」の物語のなかで、青年オオナムヂは因幡の八上姫に出会い、二人は結ばれた。幸福な一夜であったであろう。オオナムヂは出雲の国へ帰っていった。そして、八上姫は大国主の御子を身ごもっていることを知った。

『古事記』は、その後の二人の恋の成り行きについて、次のように記している。

「さてかのヤガミヒメは、先の約束どおり、大国主神と結婚された。そしてそのヤガミヒメは出雲へ連れて来られたけれども、その本妻のスセリヒメ（須世理姫）を恐れて、その生んだ子は木の股にさし挟んで因幡へ帰った。それでその子を名づけてキマタノ神といい、またの名をミキノ神という。」<sup>5)</sup>

目出たく八上姫は大国主の側室となったが、しかし本妻であるスセリ姫を畏れるあまりに、自分の御子を出雲の王子として大国主のもとに残し、姫ご自身は因幡の国へ帰ってしまわれたという。

ここに記された八上姫の顛末については、因幡ではなく、出雲側の神社に伝承が残されているので、ここに紹介しよう。

**御井神社の八上姫** 出雲大社から15kmほど東へ行った宍道湖のほとりに、『出雲国風土記』にも記載された古社「御井神社」（出雲市斐川町直江）がある。祭神は木俣（きまた）神、別名御井（みみ）神である。安産と水（井戸）の守護神として信仰されている。その由緒は次のように記載されている。

「懐妊された八上姫神は出雲の大国主神を訪ねられたが、正妻須世理姫神を恐れて、共に暮らすことができない。やむなくこの直江の里まで引き返された時、産気づかれた。そこで生井・福井・綱長井の3つの井戸を掘り、身を清めたところ、まことに安産で玉のようにうるわしい御子をあげられた。」<sup>6)</sup>

出雲の国に呼ばれて、八上姫ははるばる八上の里（現在の鳥取市河原町）から海路を経て——おそ



八上から出雲へ向かう八上姫の往路（弥生時代を想定）  
（「Flood maps on your Web-Site」<sup>7)</sup>により海拔5mに設定）

らく途中で東郷池や淀江瀉に停泊したであろう——、出雲の大国主の宮を訪ねられた。しかし正妻のスセリ姫の嫉妬を恐れて、大国主の側室として出雲で過ごすことを諦めた。それで因幡へ引き返すことにしたが、仏経山の北麓にある直江の里で八上姫は産気づいた。元気な男の御子が産まれた。そこで、産湯のために、生井（いくい）、福井（さくい）、綱長井（つながい）の3つの井戸をお使いになった。それだから、この社は「御井社」（みいのやしろ）といわれるようになった。そして御子を産湯させてから、木の俣に預け、大国主のもとに王子として託して、八上姫は因幡へ帰られた。だから、その御子は「木俣神」、またの名を「御井神」（三井神）と名づけられたということである。

**実巽神社の八上姫** ところで、この御井神社から南に1 km 離れたところに境内社として「実巽神社」（じっそんじんじゃ）がある。その東側にはこの地の「姥捨山（うばすてやま）」があったという。還暦（61 歳）になると、老人たちは姥捨山へ隠居して、その地のお産や赤子の世話をしたという。その還暦の年を「木股年（このまたどし）」と言ったそうである。八上姫が産気づかれたときにも、姫はこの「姥捨山」の麓にある産屋に導かれ、木股年の老女たちによって御子神を取りあげられたとの言い伝え<sup>8)</sup>があるということである。祭神は、もちろん八上姫である。

「八上姫が御子を木の股に挟んで因幡に帰って行かれた」と伝えられているが、実際は、「木の股」に預けたのではなく、木股年の老女たちに預けて因幡に帰って行かれたということなのであろう。

**八上の里** 御子神を出雲に残して、八上姫は因幡の国へ帰った。その後の詳しい消息は不明である。しかし、八上の里には八上姫の御陵とされる嶽古墳（だけこふん）があり、八上姫を祀り偲ぶ「売沼神社」（めぬまじんじゃ）が建てられている。「売沼」とは、「売（め）」は「女（め）」「姫」を意味し、「沼（ぬ）」は「玉」を意味し、「玉のように美しい姫」という意味をなしている。近年、売沼神社の東隣には八上姫公園が整備され、カップルの出会いの聖地とされている。

### （3）大国主の妻問い

**妻問婚** 『古事記』は、八上姫の婚姻譚を手短に語ったあと、大国主の「妻問い」に場面を転じている。まず越の国の女王・奴奈川姫（ヌナカワヒメ）への妻問いにはじまり、そのあとに本妻スセリヒメとの妻問いが引き続く。

学術的には「妻問婚」といい、今日のように夫婦が同居するのではなく、夫が寝所となる妻の家を訪れる。一夫多妻制で、日によって妻の家を替えていくことになる。縄文・弥生時代から古墳時代（ヤマト王権時代）、さらに平安時代中期にいたるまで、日本で一般的に行われていた婚姻である。夫婦のあいだに出来た子どもは、一般的には母親の一族に組み入れられ、妻の実家で養育された。夫が妻の家に通わなくなったら、「床去り」「夜離れ」といって、離婚となる。また、通ってきた夫を妻が追いついてしまえば、やはり離婚となるそうである。

**大国主の妻問い** いったい、大国主はどのような妻問いをしたのだろうか。まずは、出雲国内に残された記録をたどってみよう。『出雲国風土記』には大国主の「妻問い」として、4つの記事が残っている。この風土記では、大国主は一貫して「所造天下大神（あめのしたつくらししおおがみ）」という呼称で登場する。

**綾門姫** 1つ目は出雲郡宇賀郷に住む綾門姫（アヤトヒメ）への妻問いである。「所造天下大神が、神魂命（カミムスヒノミコト）の御子、綾門日女命（アヤトヒメノミコト）に求婚なされたが、そのとき、女神は承諾せずに逃げ隠れなされた。この時大神が〔探しまわって〕伺い求められたところがすなわちこの郷なのである。だから、宇賀（うか）という。<sup>9)</sup>」

**神魂命** 神魂命は、『古事記』では「神産巢日命（カムムスヒノミコト）」として登場している。「因幡の白うさぎ」の物語において<sup>10)</sup>、八十神に殺されたオオナムヂを救おうとする母親に手助けの指令を出したのが、この神魂命である。出雲系の神々を背後から支援する出雲の祖神的な存在として登場するが、これ以上の素性についてはよくわからない神である。『古事記』によれば、神産巢日命は「高天原に成り出でた神」<sup>11)</sup>とされているので、「天津神」であり出雲出身の神ではない。それにしても、神魂命の御子、少なくとも6柱が出雲国に住んでいた。男御子神が2柱（島根郡生馬郷<sup>12)</sup>、出雲郡漆

治郷<sup>13</sup>）、女御子神が4柱（出雲郡宇賀郷<sup>14</sup>、島根郡加賀郷<sup>15</sup>および法吉郷<sup>16</sup>、神門郡朝山郷<sup>17</sup>）である。その父神（母神かもしれない？）神魂命は、出自は出雲国ではないとしても、出雲国に本拠をおいていた神ではないかと思う。

**真玉著玉之邑姫** この神魂命の娘でもう一人、やはり大国主がその姫の家へ妻問いしている。2例目の妻問いは神門郡朝山郷（現在の出雲市朝山町）に住む真玉著玉之邑姫（マタマツクタマノムラヒメ）である。「神魂命の御子、真玉著玉之邑日女命（マタマツクタマノムラヒメノミコト）が〔鎮座して〕おいでになった。そのとき、所造天下大神、大穴持命が娶りなさって、毎朝にお通いになった。だから朝山という。』<sup>18</sup>

第3例目・4例目の妻問いは、いずれもスサノヲの娘御子が相手である。

**八野若姫** 3例目は神門郡八野郷（現在の出雲市矢野町）に住む八野若姫（ヤノワカヒメ）。「〔神門郡の八野郷に、〕須佐能袁命（すさのをのみこと）の御子、八野若日女命（やのわかひめのみこと）が鎮座していらっしやった。そのとき、所造天下大神、大穴持命が娶りなさろうとして、屋を造らせなされた。だから、八野という。』<sup>19</sup>

この八野郷は現在出雲市矢野町となっており、八野神社が建っている。由緒には、上にある『出雲国風土記』以上の伝承はないが、八野若姫とともにスサノヲの御子・大年が祀られている<sup>20</sup>。二人が妹と兄であるのは確かだが、なぜこの二人がここに祀られているのか、まったく不明である。

**大年** 大年神は毎年正月に各家にやってくるいわゆる「正月さま」とされているが、なぜそのように信仰されているのかはまったくもって謎である。『古事記』には、スサノヲ、大国主に次いで、なぜか大年の神裔の系譜が詳しく載せられている。それだけ重要な神であるとのメッセージが込められている神であり、スサノヲの五男の御子だが、どのような功績を残したのか、まったく素性のわからない謎にみちた神なのだ。『古事記』や『日本書紀』によって、その素性や功績を消されてしまった神のようである<sup>21</sup>。それだけに、磐余彦（イワレヒコ＝神武天皇）がヤマト入りしたとき、すでにヤマトを統治していた饒速日（ニギハヤヒ）は実は大年ではないのかという説や、ヤマトの三輪山に祀られている大物主は実は大年ではないのか、という根強い説もある。あるいは、日本中に稲作農耕を広めた、いわば日本農業の祖神的な存在だったのではないだろうか。

**須世理姫** 最後の4例目は、神門郡滑狭郷（現在の出雲市神西湖の付近）に住む須世理姫（スセリヒメ）。すでに先述した大国主の正妻である。「須佐能袁命の御子、和加須世理比売命（わかすせりひめのみこと）が鎮座していらっしやった。そのとき、所造天下大神が娶りてお通いになったときに、その社の前に盤石（いわ）があり、その上がとても滑らかだった。そこでおっしゃられたことには、『滑らかな岩である。』とおっしゃられた。だから南佐（なめさ）という。』<sup>22</sup>

**大国主の妻たちの住所** こうして、『出雲国風土記』によれば、大国主は出雲の国内に1人の正妻（滑狭郷の須世理姫）と3人の側室（八野郷の八野若姫、宇賀郷の綾門姫、朝山郷の真玉著玉之邑姫）をもっていたことがわかる。これら4人の妻たちは、出雲の初代王スサノヲと出雲の祖神神魂命の娘御子という、いずれも高貴な姫君たちだということだ。

ところで、大国主の妻たちの住んでいた地域に注目したい。次ページの図<sup>23</sup>にその4カ所の地域を示している。

さて、この図を見て何が見えてくるだろうか？

大国主が出雲の国内で政務にあたった宮はどこだったのか、という問題がしばしば提起されるが、その答えには未だに定説がないのが現状である。三刀屋や出雲の東部（松江や安来）にあったのではないかという説もある。

さて、大国主はこの4人の妻たちの家へ妻問婚、通い婚をしていた。当然のことであろうが、これら妻たちの家から通える所に大国主の宮があって、そこで大国主は政務にあたったと考えるべきであろう。そうであれば、大国主は出雲郡か神門郡のどこかに宮をおいていたと推測せざるをえないであろう。

**大国主の宮** 『出雲国風土記』には大国主が住まれた宮についての言及がある。

出雲郡杵築郷の章では、「八東水臣津野命（やつかみずおみづぬ）が国引きをなされた後に、所造天下大神（あめのしたつくりししおおかみ）の宮をお造り申し上げようとして、諸の神々たちが宮の場所に集まり築きなされた。だから寸付（きづき）という」<sup>24)</sup>とある。

大国主の宮を造るために、諸々の神々が杵築に集まって御宮を築いた。だから、その地を「寸付（きづき）」というのだと説いている。現在の出雲大社である。

さらに、出雲御崎山（いずもみさきやま）についての説明箇所では、「(出雲御崎山の) 西の麓にいわゆる所造天下大神の社が鎮座している」<sup>25)</sup>とある。「出雲御崎山の西の麓」とは杵築のことである。このように、『出雲国風土記』にも記されているように、大国主の宮は杵築大社、現在の出雲大社の場所にあったと明瞭に語っている。

大国主が出雲にいるときに政務にあたった宮は、杵築すなわち現在の出雲市大社町杵築にあって、ここから大国主は妻たちの家へ通い婚をしていたということであろう。

#### (4) 奴奈川姫への妻問い

**他国への妻問い** 『古事記』によれば、大国主は、因幡の八上姫との成婚のあと、越（こし）の国へ行って、女王・奴奈川姫（沼河姫、ヌナカワヒメ）<sup>26)</sup>へ妻問いをしたという。

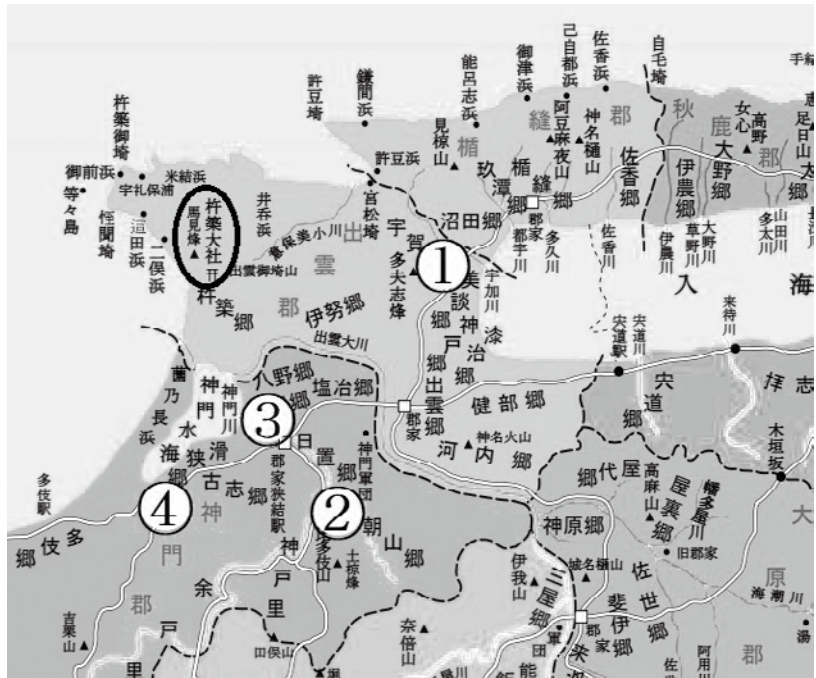
他国の王女または女王に求婚するということは、たんにその女性を娶るということではなく、その女性をとおして国を支配するか、あるいは同盟関係を結ぶことを意味する。国土を拡大させるために、大国主は越国へ遠征に行ったのである。

**古事記にみる奴奈川姫への妻問い** 『古事記』の「妻問い」の章は、次のような歌からはじまる。

「八千矛神（大国主）は日本国中で思わしい妻を娶ることができなくて、遠い遠い越国（こしのくに）に賢明な女性がいるとお聞きになって、美しい女性がいるとお聞きになって、求婚にしきりにお出かけになり、求婚に通いつづけられ、太刀の緒もまだ解かずに、……少女の寝ている家の板戸を……しきりに引き揺さぶって立っておられると、青山ではもう鶉（ぬえ）が鳴いた。野の雉はけたたましく鳴いている。庭の鶏かげは鳴いて夜明けを告げている。」<sup>27)</sup>

「八千矛神」とは八千矛すなわち軍隊を率いたときの大国主をあらわす別称である。軍隊をどのように率いて行ったのか、具体的な記述はなされていない。しかし少なくとも、上に引用した詩歌から読みとれることは、越国への妻問いはけっしてすんなりと実現したわけではなかったことがわかる。お目当ての姫君に会うこともできずに、夜が明けてしまった。苛立つ大国主の滑稽な姿が目浮かぶ。おそらく大国主は越国を平定するために、一度ならず幾度にもわたって遠征に出かけて行ったのであろう。

出雲軍の制圧にたいする奴奈川姫の返歌は、まことに艶めかしく印象的である。



出雲国内にいる大国主の妻たちの住所

(①綾門姫 ②真玉著玉之邑姫 ③八野若姫 ④須世理姫)

「八千矛神の命よ、私はなよやかな女のことですから、わたしの心は浦州にいる水鳥のように、いつも夫を慕い求めています。ただ今は自分の意のままに振る舞っていますが、やがてはあなたのお心のままになるでしょうから、鳥どもの命を殺さないでください。」<sup>28)</sup>

結果的には、国力の乏しい越国は出雲国によって平定されることになった。『古事記』は次のような一文で結んでいる。「そしてその夜は会わないで、翌日の夜お会いになった。」<sup>29)</sup>一度目の妻問いは失敗に終わった。そして、二度目の妻問いでようやく奴奈川姫の越国は陥落した。そういうことではなかったか。大国主は苦勞の末ようやく越国を手に入れた。

**越国平定の目的** ところで、なぜ、はるか遠くにある越国を手に入れようとしたのだろうか？ そもそも、スサノヲが戦った「八岐大蛇」は「越のオロチ」だった。越のオロチ族が出雲のタタラ（製鉄）を支配していた。スサノヲはそのオロチ族のタタラを制圧し奪回した。そして、二代目の出雲王・大国主がその越を平定するために遠征に出た。その越には、いったい何があるというのだろうか？

**奴奈川の玉** 奴奈川姫の名に由来する奴奈川にはいったい何があるのか、その重大な手がかりを与えてくれる歌が『万葉集』第13巻3247番にある。

「沼名川の 底なる玉 求めて 得し玉かも 拾ひて 得し玉かも  
あたらしき君が 老ゆらく惜しも」

『万葉集』に歌われた、この「沼名川」（ぬなかわ）は、漢字こそ異なるが、『古事記』に登場する奴奈川姫の「奴奈川」と同一の川である<sup>30)</sup>、と今日では考えられている。

中西進『万葉集・全訳注原文付』による現代語訳をここに紹介しておよう。

「沼名川の底にある玉、探し求めて手に入れた玉よ、拾ってもっている玉よ、その如く大切なあなたの老いてゆくのが惜しいよ。」<sup>31)</sup>

**奴奈川（姫川）のヒスイ** 「奴奈川」は現在の新潟県糸魚川市を流れる「姫川」と比定されている。奴奈川姫の「姫」に因んで名づけられた川、「姫川」である。その「沼名川の底なる玉」、すなわち姫川の底に転がっている玉とは、いったいどのような石なのであろうか？ それが緑色の宝石、翡翠（ヒスイ）だということが知られたのは、ごく最近のことである。古い文献では「玉（ぎょく）」と呼ばれ、ハンマーで叩いても容易に割れない「硬玉」である<sup>32)</sup>。そして、その瑞々しい緑色の石は生命力のシンボルであり、不老不死の効果をもつ秘石と信じられていた<sup>33)</sup>。

縄文時代から弥生時代、さらには古墳時代にいたるまで、姫川下流域や糸魚川市（古代の沼川郷）周辺の海岸には大規模なヒスイ工房があって、ここで作られた勾玉（まがたま、曲玉）や管玉（くだたま）、大珠（たいしゅ）が列島の各地へと広がっていった。北海道から九州にいたる日本全国で出土しているヒスイ製遺物はすべて糸魚川産であるという<sup>34)</sup>。当時はヒスイのありかこそ知られていなかったものの、姫川流域の河原でヒスイの原石を拾ったり、河口付近の海岸に打ち上げられた原石を拾ったりして、これを加工していた。しかしその後、仏教の伝来とともに、ヒスイの装飾文化は衰退し<sup>35)</sup>、姫川流域にヒスイの原石があることも完全に忘れ去られてしまった。日本にはヒスイの原産地はなく、日本のヒスイはすべてビルマ（現在のミャンマー）産であるというのが最近までの常識であった<sup>36)</sup>。

ところが、1938年に姫川の支流小滝川（こたきがわ）でヒスイの原石が発見され、その後1954年、56年、58年に日本考古学協会によって糸魚川市の長者ヶ原遺跡が発掘調査された。その結果、縄文時代のヒスイ加工場の存在が確認され、小滝川とその西を流れる青海川（おうみがわ）の河原2カ所でみごとなヒスイ岩塊が発見された<sup>37)</sup>。奴奈川姫は翡翠を産する越の女王だったのである。

『古事記』に物語られている大国主による奴奈川姫への妻問いは、奴奈川姫を娶って越国を平定するとともに、奴奈川にある貴重な宝石ヒスイを手に入れることが目的だったのである。

## （5）越国・能登の平定

ところで、大国主が越国を平定するために、どのようなルートをとって北陸へと遠征に出て行ったのか？ 私たちはいくつかの文献や各地に残る神社伝承をとおしてたどってみようと思う。

**出雲・拝志** 大国主が越を平定するために出雲の「拝志（はやし）」という地（現在の島根県松江市玉湯町林）を出発したと、『出雲国風土記』意宇郡拝志郷に書かれている。

「所造天下大神命が、越の八口を平定しようとしてお出かけになったときに、ここの林が盛んに茂っていた。そのときおっしゃったことには、『わたしの御心をはやしたてる（引き立てる）ものだ』とおっしゃった。だから林という。（神亀三年に字を拝志と改めた。）ここに官庫がある。」<sup>38)</sup>

この林に囲まれた官庫の跡に、現在は布宇神社（ふうじんじゃ）がある。大国主はこの地から越に向かって船出したのである。



出雲国・布宇神社（弥生時代を想定）

（「Flood maps on your Web-Site」により海拔 5 m に設定）

**越・八口** 大国主が平定する的方向に向かったという「越の八口」がいったいどこにあるのかは、いまだに定説がない。『出雲国風土記』の注釈<sup>39)</sup>によれば、「八口」は新潟県岩船郡関川村八ツ口とされている。関川村は風光明媚な田舎文化が旅情を誘うが、その近辺には出雲に関連する神社もなく伝承もない。島根県の郷土史家・加藤義成は「八口の原義は谷口、即ち谷の入口」<sup>40)</sup>ではないかと推測している。これを受けて出雲の郷土史研究者・岡本雅享は、「八口」とは凹地のことで、かつては海峡だった邑知潟（おうちがた）地溝帯のことであろうと推理している<sup>41)</sup>。

その邑知潟は、今でこそ羽咋市の平野部をなしているが、縄文時代には海にえぐられた入江だった。弥生時代には、河から運ばれた土砂が出口をふさぎ、浅い湖沼となったのが、すなわち「潟」（ラグーン Lagoon）である。日本海の海岸沿いに散在する潟は、湖とともに、古代の海洋交通を担う良港だった<sup>42)</sup>。

その邑知潟の入口に、現在は気多大社（石川県羽咋市寺家町）が建っている。祭神は大己貴（おこなむち）命、すなわち大国主。能登国の一ノ宮である。

**気多大社の伝承** 気多大社に伝わる古い伝承によると、「上世の昔、大己貴尊が出雲より因幡の気多崎に至り、そこから当国へ渡って平定し、その後、所口に鎮祭された」<sup>43)</sup>と語り伝えられている。また、「気多大社古縁起」によれば、「往古、越中北島の魔王が鳥に化して人民を害し、海では舟の通行を妨害し、また鹿島路湖水には大蛇が出現して人民を苦しめていた。この時、大己貴尊が出雲より 300 余神の眷属を引き連れて能登国に來臨し、化鳥と大蛇を退治し、この地に垂跡した」<sup>44)</sup>という。

これらの伝承によれば、大国主は、300 人余りの兵を率いて、出雲国の拝志（林）を船出した。隣の因幡国の気多崎（現在は鳥取県鳥取市小沢見にある気多岬——現在は海水浴場だが、かつては舟宿だった——）に立ち寄って、日本海を渡って（おそらく豊岡・敦賀といった入江を経由して）越国の北島（現在の羽咋市）に到着した。

**邑知潟** 羽咋市（北島）から東北の方向に約25km離れた七尾市所口までは、現在は陸つづきの平野となっているが、弥生時代には海面が現在より5mほど高く、当時の邑知潟（鹿島路湖水）は10kmほど深く（現在の七尾線能登部駅付近まで）湾入していた。そこから七尾市までの約15kmは陸路となり、当時は舟曳路になっていたと考えられる<sup>45)</sup>。

出雲や丹後半島から日本海を北上して新潟や東北へ向かうときには、邑知潟から七尾までの横断運河を通り抜けることで、能登半島を横断していったのである。



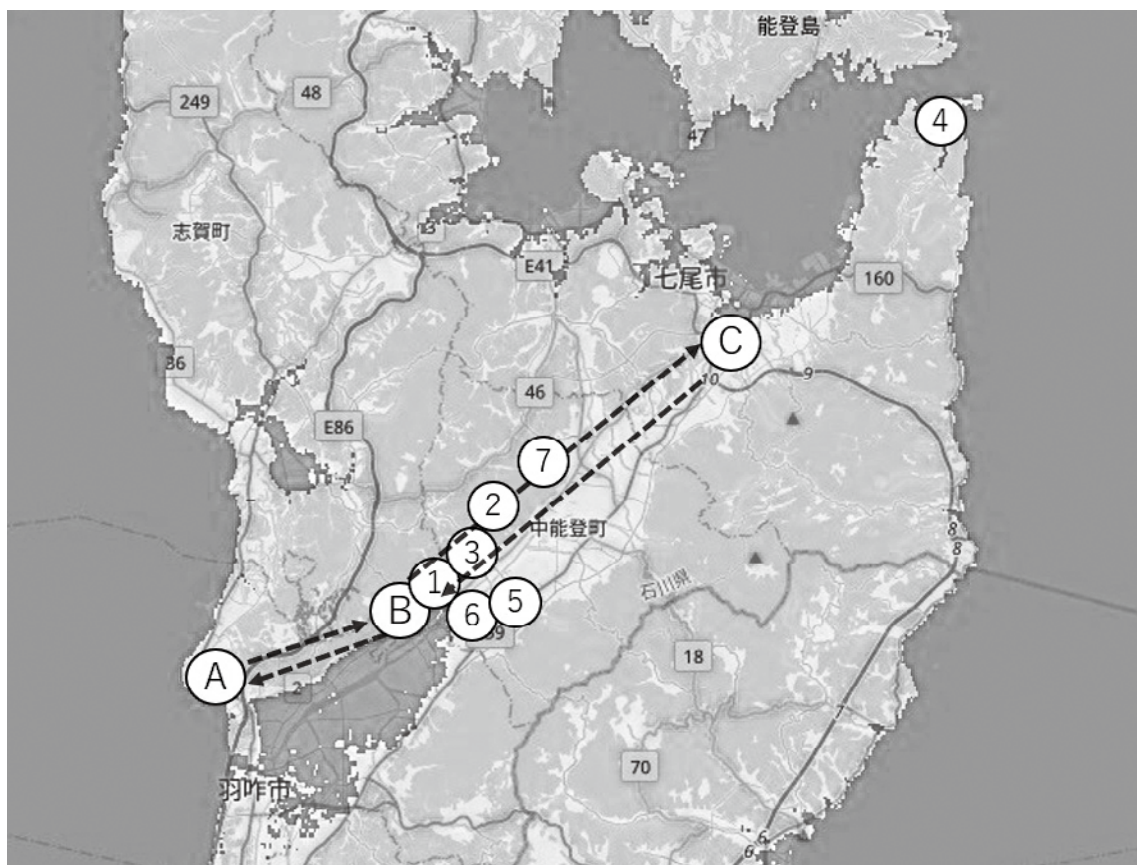
北島、邑智潟、所口（弥生時代を想定）  
（「Flood maps on your Web-Site」により海拔5mに設定）

**能登平定** この北島（羽咋）から邑知潟のあたり一帯で住民を苦しめていた賊徒たちを、大国主は成敗し平定した。その後、七尾所口に抜けて、そこで大国主を奉祭したのが気多大社の本宮と称される能登生国玉比古神社（石川県七尾市所口町）である。崇神天皇の御代に、この社の祭神を分霊し、羽咋に勧請して気多大社を創建したという経緯から、七尾の能登生国玉比古神社は気多大社の「元宮」とか「本宮」と称されている<sup>46)</sup>。祭神はもちろん大国主である。

**国平祭** 大国主のこの能登平定に因んで、気多大社では毎年3月18日から23日にかけて「国平祭（くにむけさい）」が行われる。地元の人たちは、これを親しみをこめて「おいで祭り」と呼んでいる。大国主の神輿が羽咋の気多大社①から巡航し、とも闘った少彦名（スクナヒコナ）の神霊を石に留めたとされる宿那彦神像石神社②（すくなひこかみかたいしじんじゃ）（石川県鹿島郡中能登町金丸）に向かい、ここで一泊する。翌日には少彦名が神輿に同座して七尾の気多本宮③に赴き、一泊して祭典を営む。最後は羽咋の気多大社に戻って、大蛇退治を再現した「蛇の目」神事を行って締めくくられる<sup>47)</sup>。

**大国主の能登平定に関係する神社** 羽咋から七尾に抜ける邑知潟地溝帯には、上の神社以外に、大国主の能登平定にかかわった諸神を祀る神社がいくつも建立されている。





- ①能登生国玉比古神社（金丸） ②能登部神社 ③能登比咩神社  
 ④御門主比古神社 ⑤奈鹿曾彦神社 ⑥奈鹿曾姫神社 ⑦白比古神社  
 (弥生時代を想定、「Flood maps on your Web-Site」により海拔 5 m に設定)

能登生国玉比古神社①（石川県鹿島郡中能登町金丸）は、大国主と少彦名に協力して能登平定に功をたてた多食倉長命（たけくらながのみこと）を能登の国魂として祀っている。また多食倉長の娘は少彦名の后となって、御子・菅根彦（すがねひこ）を産み、その子孫が代々この地・金丸の村主（すぐり）であるという<sup>48)</sup>。

能登部神社②（鹿島郡中能登町能登部上口 70）と能登比咩神社③（石川県鹿島郡中能登町能登部下）は、能登平定後の大国主と少彦名をねぎらい接待した兄・能登彦と妹・能登姫をそれぞれ祀っている<sup>49)</sup>。

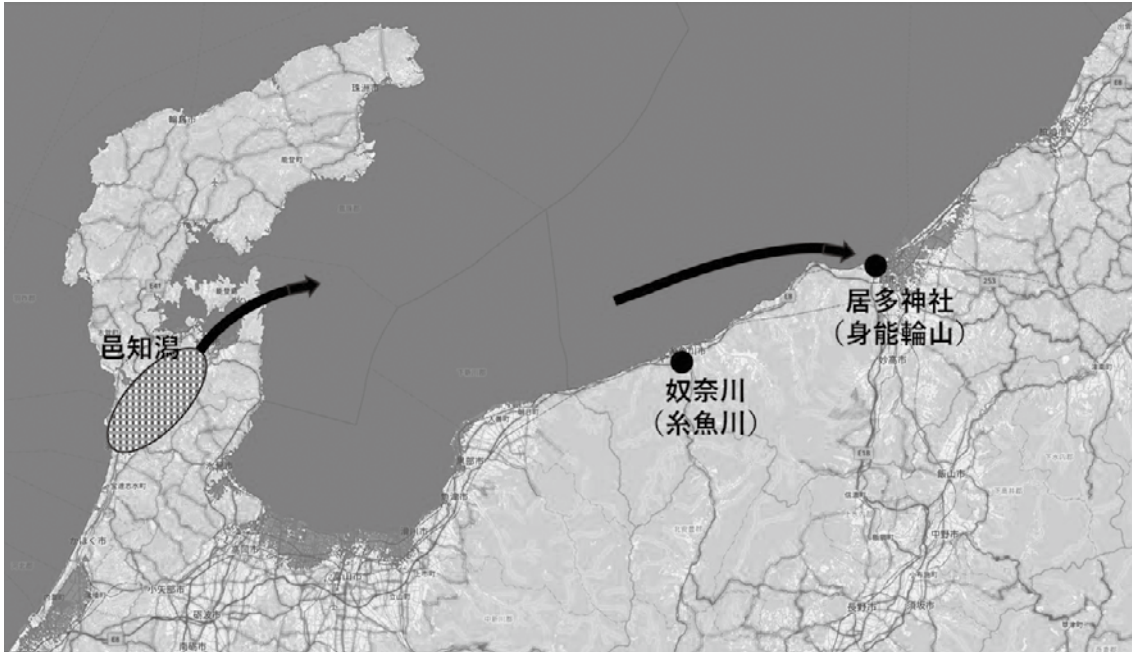
また、七尾の東端にある④御門主比古神社（石川県七尾市鶴浦町）は、平定後の大国主に鶴を献上した御門主彦（みかどぬしひこ）を祀っている<sup>50)</sup>。

**大国主の御子神** 少彦名がこの地に子孫を残しているが、大国主もこの地の姫たちとのあいだに幾人かの御子をもうけている。曾祢（そね）にある奈鹿曾彦神社⑤（なかそひこじんじゃ）（鹿島郡中能登町曾祢）<sup>51)</sup>は大国主の御子・奈鹿曾彦を祀り、下曾祢にある奈鹿曾姫神社⑥（なかそひめじんじゃ）（羽咋市下曾祢町）<sup>52)</sup>は大国主の姫御子・奈鹿曾姫を祀っている。中能登にある白比古神社⑦（しらひこじんじゃ）（鹿島郡中能登町良川）<sup>53)</sup>は大国主の御子・白彦を現地水田開拓の祖神として祀っている。

このように能登に、大国主の子孫が芽生え、根づいた。大国主の家臣たちも、この地の娘たちを娶り、子孫を残したであろう。それは、まさしく、能登が出雲と血縁関係をもつ国となり、出雲国が東方へ進出するための一大拠点（橋頭堡）<sup>54)</sup>になったということであろう。そして、おそらく越への進出は一回だけのことではなく数回にわたって行われたと考えるべきであろう。

### （6）越・奴奈川の平定

**居多・身能輪山** 大国主率いる出雲勢は、能登邑知潟を橋頭堡として、ここから海路・富山湾をとおって、越後国の居多ヶ浜（こたがはま、新潟県上越市）に上陸し、海岸沿いの身能輪山（みのわやま、現在の糸魚川市五智6丁目、西隣に岩殿山がある）に宮殿を設けた<sup>55)</sup>。現在、身能輪山は運動公園と



邑智潟、奴奈川、居多神社（弥生時代を想定）  
〔「Flood maps on your Web-Site」により海拔 5 m に設定〕

なっており、（明治時代に海岸浸食のために社が崩壊し）公園の東隣に居多神社が遷座している。居多神社の祭神は言うまでもなく大己貴命、すなわち大国主である。現在は「こた」と呼ばれるが、古くは能登の気多大社と同じく「けた」であった。鎌倉時代に、親鸞聖人が流罪でこの居多ヶ浜に上陸したことも、よく知られている<sup>56)</sup>。

その古い社伝によれば、大国主は、身能輪山を本拠地として、当地を国土開発・国土経営し、農耕・漁業・殖産などの技術を教えられた<sup>57)</sup>という。

そして、西頸城（にしくびき＝現在の糸魚川市）奴奈川（ぬなかわ）郷に、かねてから評判の「賢くも美しい」奴奈川姫がおり、大国主は、居多の身能輪山から、奴奈川姫に向かって妻問いして、王妃となし、この地、居多で御子神・建御名方（たけみなかた）命（後に「国譲り」で敵の武将・健甕槌と闘って諏訪国まで敗走した皇子）をもうけたのである<sup>58)</sup>。

**奴奈川姫をめぐる攻防** 大国主と奴奈川姫の婚姻は、しかし決して平和的な和睦ではなかったようである。『古事記』にも語られているように、奴奈川姫に対する大国主の妻問いは、一度目は失敗に終わっている。二度目の妻問いによって、ようやく大国主は奴奈川姫を娶り、奴奈川の翡翠を手に入れることができた。いっ



糸魚川市海望公園の奴奈川姫母子像<sup>59)</sup>

たい、そこにはどのような攻防があったのだろうか？

かつて姫が住んでいた奴奈川郷（沼川郷＝現在の糸魚川市）に残る伝説（「西頸城郡の伝説」<sup>60</sup>）によれば、奴奈川姫の夫である松本の豪族が大国主と争い、福来口（ふくがくち）で戦ったが、夫は敗れて、姫川を渡り、濁川の谷に沿って市野々に上り、登り切った所で、大国主に追いつめられて首を切られたという。

また、それとは別の伝承にも、やはり地元の豪族が大国主に反旗を翻していた記録が残っている。

かつて姫が住んでいた屋敷の跡地（現在の糸魚川市一ノ宮）に、今は天津（あまつ）神社の境内に奴奈川神社がある。祭神は、言うまでもなく、奴奈川姫である。その古い社伝に、詳細な「奴奈川姫伝説」<sup>61</sup>が残されている。

地元の根知の豪族が大国主に挑んだ話である。（以下、現代文に訳して引用する）「かねてから奴奈川姫に想いを寄せていた根知の豪族・根知彦が、大国主の出現をひどく憤り、大国主が住む身能輪山の宮へ乱入したのです。話し合いの末、山の高所から飛び比べて勝った者が奴奈川姫を娶ることにしました。根知彦は黒い青毛の駒（子馬）に跨がり、大国主は牛に乗って、二人は駒ヶ岳の絶頂に立ったのです。まず、根知彦が駒に鞭をあてて飛んでいきました。別所山の一角に爪痕を残しました。次に、大国主が牛を励まして飛んでいきました。不思議なことに、根知彦の駒が残した爪痕よりも二、三町先へ飛んで行かれたのです。大国主の勝ちでしたが、これを見た根知彦が大いに憤って、もう一度勝負をしたいと申し出たのです。大国主はこれを快く受けました。根知彦が憤怒にまかせて飛んだところ、天の神の咎めでしょうか、わずかに駒ヶ岳の中腹に達しただけで、しかも駒は少しも動かず、そのまま石に化してしまったのです。今でも駒ヶ岳の中腹に駒の形をした岩が残っていますが、それはこの時のものなのです。ところが、この石と化した駒が、時候の変わり目などになると、折々寝返りをするところがあるのだと、今なお土地の人たちは信じているそうです。」<sup>62</sup>

こうして大国主は土地の豪族との争いに勝って、ようやく奴奈川姫と沼川の翡翠を手に入れたのである。そして、その時の飛び比べの顛末が「駒ヶ岳」の呼び名として残ったということである。

### （7）妃・奴奈川姫のその後

**建御名方の誕生** 奴奈川姫をめぐる攻防に勝利した大国主は、奴奈川姫を連れて居多の宮（身能輪山あるいは岩殿山）に帰還した。ここで、二人のあいだに、のちの諏訪大社の祭神とされる建御名方が誕生したという。

現在、岩殿山に天台宗の寺院、「岩殿山明静院（いわどのさんみょうじょういん）」がある。その伝承によれば、大国主は岩殿山の岩屋で奴奈川姫との新婚生活を送ったという。そして、奴奈川姫は子を身ごもり、産婆の姥嶽姫（うばたけひめ）が男児をとりあげた。建御名方の誕生である。

やがて、「大国主は出雲へ、奴奈川姫は糸魚川へ戻り、成人した建御名方命はこの岩屋にとどまります。そのうちに、天孫民族（天皇のご先祖様）がやってきて、高志の国を譲るよう、申し入れてきました。しかし、建御名方命はこれを拒み、高志の兵と共に勇猛に戦いましたが、かなわず、糸魚川から塩の道を通って信州諏訪の海へ逃れました。以来、建御名方命は諏訪大社の祭神（諏訪大明神）となります。」<sup>63</sup>

この伝承を信ずれば、大国主は、越の国土開拓を終えると、妃の奴奈川姫を伴わずに出雲へ帰還していったという。奴奈川姫は子の建御名方とともに越国にとどまった。しかし、やがて出雲への「国譲り」という政変が起こると、天孫族（大和政権）は出雲に次いで越に対しても「国譲り」を要求してきた。

この伝承は、私たちがよく知っている『古事記』の「国譲り」物語と、少し違っていることに注目しておかなければならない。『古事記』では、建御名方は、出雲に対して「国譲り」を要求する健御雷と争い、破れて出雲から諏訪まで敗走したことになる。しかし、地元「岩殿山明静院」の伝承によれば、建御名方は、越に対する「国譲り」要求に対して、これを拒んで、天孫族と闘って敗れ、居多から諏訪まで敗走したという話になっている。この地元の伝承のほうが、私には至極理にかなっ

ているように思える。

**奴奈川姫の終焉** ところで、奴奈川姫は、大国主の妃となった後、どのような一生をおくることになったのであろうか。『古事記』に描かれた二人の関係は、いかにも濃密なロマンスに彩られている。しかしそこには、後世の政治的な脚色がほどこされ、本当の史実が覆い隠されているように思われる。地元に残る奴奈川姫伝説を見るかぎり、奴奈川姫は悲劇的な最後を遂げたようである。

先に紹介した奴奈川神社の「奴奈川姫伝説」は、奴奈川姫が最後には自害したことを告げている。

「糸魚川町の南にある平牛山に稚子ヶ池（ちごがいけ）という池がある。このあたりは奴奈川姫が住んでおられた宮居の跡だといわれている。また、奴奈川姫がこの池で自害されたともいわれている。すなわち、いったん大国主とともに能登へ渡って行かれたが、どういうわけか、再び海を渡って、ただ一人この地へ戻り帰って来られ、ひどく悲しまれ嘆かれ、その果てにこの池のほとりの葦原に身を隠して、二度と姿を現すことがなかったのです。」<sup>64)</sup>

この伝承によると、奴奈川姫は御子・建御名方を産んだ後、大国主とともに能登へ渡っていった。（さらに出雲へ連れて行かれようとしたのかもしれない。）しかし、奴奈川姫は大国主の意に反して、能登から一人で奴奈川郷に戻って来て、絶望の果てに、宮居のある平牛の近くの稚子ヶ池で自害したと言い伝えられている。

**奴奈川姫の逃走** 同じ奴奈川神社の「奴奈川姫伝説」では、その逃走から自害にいたる経緯が詳しく語られているので、現代文に訳して紹介する。

「奴奈川姫は、色黒であり美しい方ではなかったのです。それで、一度は大国主に伴われて能登の国へ渡っていかれましたが、夫婦仲はうまくいかず、ついに姫は奴奈川の郷に逃げ帰ってこられたのです。最初は黒姫山の麓に隠れ住んでいました。しかし、能登にいる大国主が差し向けた使者に見つかり追いかけて、姫川の岸へ出て南下し、信濃北条の下にある姫川原にとどまったのです。しかしそれでも、使者はさらに追ってきたために、姫は根知谷に逃れ、山づたいに平牛山の稚子ヶ池のほとりに落ちのびてきたのです。使者もそのあとを追ってきたのですが、しかし稚子ヶ池の広い茅原のなかで姫の姿を見失ってしまったのです。そこで、茅原に火をつけて、姫を焼きだそうとして待ったのですが、姫はとうとう姿を現さないまま消えてしまわれたのです。その後、追従の者たちは泣く泣く、そのあたりに姫の霊を祀ったのです。」<sup>65)</sup>

これによると、能登を脱出した奴奈川姫は、一旦は糸魚川・平牛の宮居に立ち寄ったあと、母親の黒姫が祀られている黒姫山に隠れ住んでいたが、その後出雲の使者に追われて、姫川原、根知谷をさまよひ、最後には宮居のある平牛へ帰り、その近くにある稚子ヶ池で姿を消したということである。**「姫が淵」**または**「姫淵」** 奴奈川姫はこの稚子ヶ池で自害したとされているが、さらにそこを逃れて、姫川に沿って諏訪の方へ逃れたという別の伝説がある。

『北安曇郡郷土誌稿』に収められた「奴奈川姫伝説」によれば、糸魚川市から諏訪へ向かう途中に、中土村館山（なかどむらたてやま、現在の長野県北安曇郡中土村立山）に「姫ヶ淵」（ひめがふち）というところがあって、ここで奴奈川姫が入水自害されたという伝承がある。以下がそれである。

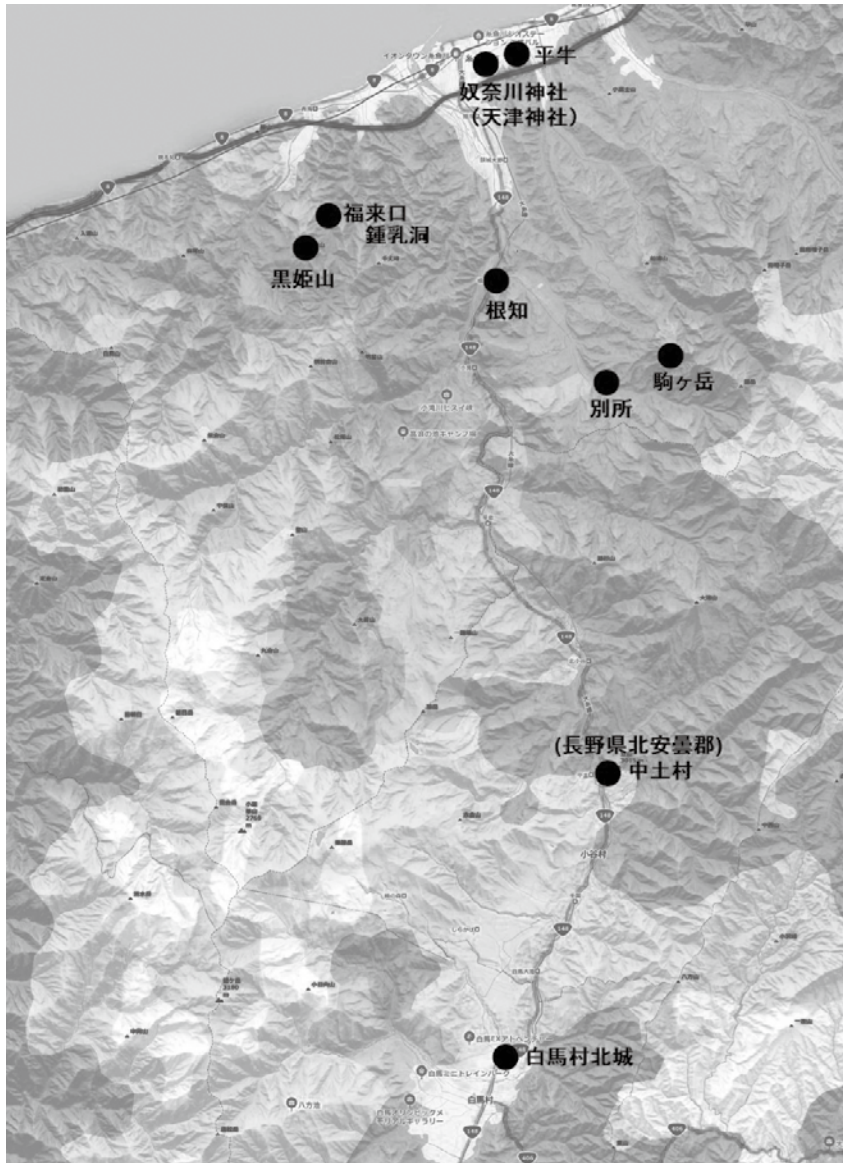
「中土村館山の中央、姫川筋に深さ幾尺あるか測り知れない深い淵があって、姫ヶ淵と呼ばれてゐた。昔、建御名方命の母奴奈川姫が身をお隠しあそばされたところだといふ。」<sup>66)</sup>

中土村は糸魚川市から姫川に沿って約30km上流の山間部にある。中土村奉納（ぶのう）部落の入り口に小高い丘があって、そこに奴奈川姫の石の墓標があり、そばには二抱えもある大きな梨の木が立っているという。

しかし、同じ「奴奈川姫伝説」には、それとは別の入水自害された場所が伝承されている。

中土村からさらに姫川に沿って約15kmほど南へ上ったところに、北城村（ほくじょうむら、現在の長野県北安曇郡白馬村北城）がある。そこに、同じく「姫淵」（ひめがふち）と呼ばれるところがある。その伝承である。

「北城村字大出（おおいで）の地籍に属する姫川の中程に、姫淵といふ深い淵がある。大昔、沼川姫の御入水の淵だと言はれてゐる。姫淵も姫川もこのことから名づけられたのだ。尚、姫は入水にあ



奴奈川姫が逃走した場所  
（「Bing maps」を利用）

たって一子を残された。その御方が諏訪大明神だ。』<sup>67)</sup>

奴奈川姫の入水自害した場所が中土村の「姫ヶ淵」なのか、それとも北城村の「姫淵」なのか。その真偽はともかく、出雲勢に追われた奴奈川姫は、里の奴奈川郷を逃れて、姫川の流れに沿って、南の諏訪へ向かっていった。その途中にある北安曇のいずれかの地で終焉を遂げたと考えてよいように思われる。『万葉集』に「沼名川の底なる玉」と歌われるように、姫の御霊は、文字どおり、奴奈川の底へ沈んでいったのであろう。美しい緑色の翡翠を産出したがゆえに栄え、出雲に併合された小国、奴奈川。その小国を背負った翡翠の女王の哀しい終焉である。

#### 《注》

- 1) 『古事記』(上)、次田真幸訳、講談社学術文庫、1977年、122頁。
- 2) 越(こし)の国は、現在の福井県(越前)・石川県(加賀+能登)・富山県(越中)・新潟県(越後)がこれにあたる。その文字は書によって異なっている。『古事記』では「高志」(こし)と記されている。(ただし、次田真幸の現代語訳では「越」と訳されている。)『出雲国風土記』では「越」のほかに「古志」「高志」とも

記されている。『日本書紀』では「越」と記されている。古い時代では「古志」や「高志」が使われていたが、大宝4年（西暦704年）に全国の国名に用いる文字が改定・統一されて、それ以後ではその国名に「越」の文字が使われている。

- 3) 大国主が大物主を三輪山に鎮座させたという、このことが具体的に何を意味するのかは、古代史上の最大の謎である。天孫族（天皇家）による大和政権が成立する以前のヤマトとは何かを解くカギがここにある。
- 4) なぜ大年がここで言及されるのか、大国主の国作りとどのような関係があるのか、また前項の「大物主」とどのように関係するのか、これらの説明はなく、大きな謎に満ちた箇所である。
- 5) 『古事記』（上）、122頁。
- 6) (Web) 御井神社一神社詳細 | 島根県神社庁 (shimane-jinjacho.or.jp)。
- 7) 地図は「Flood maps on your Web-Site」(<http://blog.firetree.net/2007/02/06/flood-maps-on-your-web-site/>)を利用している。「Flood maps」の海拔を5mに設定した地図である。弥生時代の海岸線を推測している。
- 8) 池田敏雄『出雲の原郷～斐川の地名散歩～』、斐川町、1987年、87頁。
- 9) 『出雲国風土記』、萩原千鶴訳、講談社学術文庫、1999年、191頁。
- 10) 『古事記』（上）、115頁。
- 11) 『古事記』（上）、37頁。
- 12) 『出雲国風土記』、95頁。
- 13) 『出雲国風土記』、190頁。
- 14) 『出雲国風土記』、191頁。
- 15) 『出雲国風土記』、134頁。
- 16) 『出雲国風土記』、95頁。
- 17) 『出雲国風土記』、226頁。
- 18) 『出雲国風土記』、226頁。
- 19) 『出雲国風土記』、227頁。
- 20) (Web) 八野神社 (genbu.net) 「御祭神は、須佐能袁命の御子「八野若日女命」が主祭神で大年神と共に祀られている。」
- 21) 小椋一葉『消された霸王』、河出文庫、2005年、13頁、68頁。
- 22) 『出雲国風土記』、227-228頁。
- 23) 地図は、「いにしへの島根 / 第5巻・『出雲国風土記』を歩く (shimane.lg.jp)」に掲載された『出雲国風土記』地図を利用している。
- 24) 『出雲国風土記』、190頁。
- 25) 『出雲国風土記』、209頁。
- 26) 奴奈川姫とは越後国頸城郡の沼川郷（現在の新潟県糸魚川市周辺）の地名に因んだ女神である。
- 27) 『古事記』（上）、127-128頁。
- 28) 『古事記』（上）、128頁。
- 29) 『古事記』（上）、128頁。
- 30) 「万葉集の〈沼名川〉は〈奴奈川姫〉の〈奴奈川〉である」ということを、最初に指摘したのは松本清張である。松本清張は、1961年に発表した推理小説『万葉翡翠』において、主人公の考古学者・八木助教授をとおして、万葉集3247番歌について自説を展開している。沼名川の底なる「玉」とは、水晶や滑石のようなものではなく、「青春」を表す透き通った碧色の宝石、翡翠であること、そして歌にいう「沼名川」は、当時の学会では想像上の架空の名とされているが、古事記のなかで大国主が求婚した高志（越）の「奴奈川姫」に関係する川であることを、松本清張は指摘している。（『松本清張全集』（1）、文藝春秋社、1971年、326-328頁。）  
松本清張の新説は、1961年の当時としては、画期的な解釈であった。万葉集の研究で著名な国文学者・中西進は、松本清張の新解釈を評価し、「沼名川＝奴名川」説と「玉＝翡翠」説に同意している。
- 31) 中西進『万葉集・全訳注原文付』、講談社学術文庫、1978-85、(三) 191頁。

- 32) 藤田富士夫『玉とヒスイ～環日本海の交流をめぐる～』、同朋舎、1992年、94頁。
- 33) 藤田富士夫『古代の日本海文化～海人文化の伝統と交流～』、中公新書、25-26頁。
- 34) 藤田富士夫『玉とヒスイ～環日本海の交流をめぐる～』、98頁。
- 35) 藤田富士夫『玉とヒスイ～環日本海の交流をめぐる～』、122頁。
- 36) 藤田富士夫『玉とヒスイ～環日本海の交流をめぐる～』、95頁。
- 37) 藤田富士夫『玉とヒスイ～環日本海の交流をめぐる～』、95-96頁。藤田富士夫はこの本のなかで、松本清張の『万葉翡翠』に触れ、「求めて得まし玉かも」をヒスイの玉を買い求める、すなわち交易したものとす清張の「独特な解釈」を高く評価し、「私も基本的に同意する」(137頁)と述べている。
- 38) 『出雲国風土記』、53-54頁。
- 39) 『出雲国風土記』、47頁。
- 40) 加藤義成『出雲風土記参究』、今井書店、1957年、86頁。
- 41) 岡本雅享『越境する出雲学～浮かび上がるもうひとつの日本～』、筑摩書房、2022年、120頁。
- 42) 森浩一編『古代日本海文化』、小学館、1983年、37頁。
- 43) (Web)「羽咋市歴史民俗資料館 (inoues.net)」。
- 44) (Web)「本地垂迹資料便覧 (dti.ne.jp)」。「気多神社古縁起」のなかに、次のような記事がある。「北国越中之北嶋魔王化鳥而害国土之人民不少、又到渡海之舟船亦為害止通路、又其時節、鹿嶋路湖水之大蛇出現而害人不可勝計、國中人民及惱愁、地裡昆虫到苦患、當此時大己貴尊引具三百余神末社之眷属而來降于當國、殺彼化鳥与大蛇、故國中之民唱大平、海上之船謂能登、依之越中之國分四郡号能登國、爾已來此南陽浦垂跡、天下國家君民之守護神也」。
- 45) 長野正孝『古代史の謎は「海路」で解ける』、PHP文庫、2021年、136-137頁。
- 46) (Web)「能登生國玉比古神社 能登生國玉比古神社 氣多本宮 氣多本宮 (genbu.net)」。「社伝によれば、祭神・大己貴神が出雲国より所口の地に至り、人々を苦しめていた、湖に棲む毒蛇を退治し、当地に垂迹した。よって当社を本宮と称す。社殿は孝元天皇の御代に創建されたという。崇神天皇の御代に、当社祭神を分霊し、羽咋郡に勧請して気多神社を創建された、よって当社を気多本宮と称するようになったという。」
- 47) (Web)「平国祭—氣多大社 (keta.jp)」。
- 48) (Web)「能登生國玉比古神社 (中能登町金丸) 能登の国魂の神「多氣倉長命」を祀ります - Shrine-heritager (shrineheritager.com)」。「由緒。祭神多食倉長命は神代の昔、能登国に巡行された大己貴命少彦名命と協力して国土の平定に神功をたてたまひ、能登の国魂の神と仰がれた。その姫神市杵嶋姫命 (又の名伊豆目比売命) は少彦名命の妃となって菅根彦命を生み給うた。これ金鏡翁菅根彦命で金丸村村主の遠祖である。神主梶井氏はその裔である。」
- 49) (Web) 能登部神社 (中能登町能登部上) —Shrine-heritager (shrineheritager.com)。(Web)「能登比咩神社 (中能登町) 神代より伝わる「能登上布」を生み出した二柱の織姫 (オリヒメ) を祀ります—Shrine-heritager (shrineheritager.com)」。
- 50) (Web)「御門主比古神社 (七尾市) (genbu.net)」。
- 51) (Web)「奈鹿曾彦神社 (鹿島郡中能登町曾祢ヌ75) —石川県神社庁 (ishikawa-jinjacho.or.jp)」。
- 52) (Web)「奈鹿曾姫神社 (羽咋市下曾祢町ヲ88甲) —石川県神社庁 (ishikawa-jinjacho.or.jp)」。
- 53) (Web)「白比古神社 (鹿島郡中能登町良川ト1) —石川県神社庁 (ishikawa-jinjacho.or.jp)」。
- 54) 森浩一編『古代日本海文化』、小学館、1983年、116頁。
- 55) (Web)「(直江津港 (上越市) (niitabi.com))」。
- 56) 上陸した親鸞が最初に訪れたのが居多神社だった。親鸞が赦免を願って歌を詠んだところ、境内の葦が一夜にして「片葉の葦」になったという。親鸞聖人の「越後七不思議」の1つである。(Web)「親鸞聖人の原点は越後!新潟県「上越市」にゆかりの地を訪ねる |新潟県 |トラベル.jp 旅行ガイド (travel.co.jp)」。
- 57) 谷川健一編『日本の神々～神社と聖地～8北陸』、白水社、1985年、366頁。
- 58) (Web)「居多神社 1 |書と歴史のページ プラス地誌 (ameblo.jp)」。
- 59) (Web)「日本の川—北陸—姫川—国土交通省水管理・国土保全局 (mlit.go.jp)」。

- 60) (Web)「奴奈川姫の伝説 / 糸魚川市 (itoigawa.lg.jp)」。この糸魚川市のホームページには、「奴奈川姫の伝説」として、3種類の興味深い伝説が紹介されている。①「西頸城郡の伝説」、②「天津神社並奴奈川神社」による伝説、③「北安曇郡郷土誌稿」による伝説。
- 61) (Web)「奴奈川神社 (engishiki.org)」。この神社に伝わる「奴奈川姫伝説」は、上の注60) にあげた糸魚川市ホームページの3つ「奴奈川姫の伝説」のうち②と同じものである。
- 62) (Web)「奴奈川神社 (engishiki.org)」。大国主と根知の若い豪族との攻防について記した箇所を次に引用する。  
「根知谷別所山に牛の爪の痕の三つ刻まれたる岩と、馬の足跡の一つ刻まれたる岩とあり。昔奴奈川姫命に懸想したる土地の神が大国主命の来りたまひて姫を娶らんとしたまひしを憤り、大国主命の宮居へあばれ込み、論争の結果、山の高所より跳びくらべをなし勝ちしもの姫を得ることにせんと約す。即ち土地の神は黒き青毛の駒に跨り、大国主命は牛に乗り給ひて、駒ヶ岳の絶頂に立つ。茲に於て先づ土地の神馬に鞭をあててその絶頂より飛びしにかの馬の爪痕の残れる別所の一角に達す。次に大国主命牛をはげまして飛びたまひしに、不思議にも馬の達せしところより二三町先なる地点に達したまふ。之れ今日なほ牛の爪痕の残れる岩のあるところなり。然るに土地の神この結果を見て更に大に憤り、今一度勝敗を争はん事を求む。大国主命快く諾ひたまふ。仍て土地の神先づ憤激にまかせて、馬を飛ばせしが、天なる神の咎めやありけむ、僅かに駒ヶ岳の中腹に達せしのみにて、しかも馬毫も動かず、そのまま石に化し了る。今なほ駒ヶ岳の中腹に馬の形をしたる岩石ありありと見ゆ、即ち之れなり。而して此の馬、石と化してもなほ時候のvari目などには折々寝返りをなすとは今日尚ほ土俗の信ずるところなり。」  
土田孝雄『奴奈川姫とヒスイ文化』(奴奈川姫の郷をつくる会、2003年)にも、大国主と根知の根知彦の争いについて紹介されている。(同書、150頁)
- 63) (Web)「岩殿山の歴史 - 天台宗 岩殿山 明静院 (myoujyouin.com)」。
- 64) (Web)「奴奈川神社 (engishiki.org)」。「糸魚川町の南方平牛山に稚子ヶ池と呼ぶ池あり。このあたりに奴奈川姫命宮居の跡ありしと云ひ、又奴奈川姫命は此池にて御自害ありしと云ふ。即ち一旦大国主命と共に能登へ渡らせたまひしが、如何なる故にや再び海を渡り給ひて、ただ御一人此地に帰らせたまひいたく悲しみ嘆かせたまひし果てに、此池のほとりの葦原に御身を隠させ給ひて再び出でたまはざりしとなり。」
- 65) (Web)「奴奈川神社 (engishiki.org)」。「奴奈川姫の命は御色黒くあまり美しき方にはおはざりき。さればにや一旦大国主命に伴はれたまひて能登の国へ渡らせたまひしかど、御仲むしましからずしてつひに再び逃げかへらせたまひ、はじめ黒姫山の麓にかくれ住まはせたまひしが、能登にます大国主命よりの御使御後を追ひて来たりしに遇はせたまひ、そこより更に姫川の岸へ出でたまひ川に沿うて南し、信濃北条の下なる現称姫川原にとどまり給ふ。しかれとも使のもの更にそこにも至りたれば、姫は更にのかれて根知谷に出でたまひ、山つたひに現今の平牛山稚子ヶ池のほとりに落ちのびたまふ。使者更に御跡に随ひたりしかども、ついに此稚子ヶ池のほとりの広き茅原の中に御姿を見失ふ。仍てその茅原に火をつけ、姫の焼け出されたまふを俟ちてとらへまつらんとせり。しかれども姫はつひに再び御姿を現はしたまはずしてうせたまひぬ。仍て追従の者ども泣く泣くそのあたりに姫の御霊を祭りたてまつりしとなり。」
- 66) (Web)「奴奈川姫の伝説 / 糸魚川市 (itoigawa.lg.jp)」。「奴奈川姫伝説その3 (『北安曇郡郷土誌稿』より)」の「3. 姫ヶ淵」。
- 67) (Web)「奴奈川姫の伝説 / 糸魚川市 (itoigawa.lg.jp)」。「奴奈川姫伝説その3 (『北安曇郡郷土誌稿』より)」の「2. 姫淵伝説」。